

秋期福音特別集会 (1) (京都)

眠り給うキリスト

――マタイ伝第8章16～27節、14章22～32節――

1987年11月21日

小池辰雄

波を枕として あなただけです 芥子種一粒となれ 福音は楽音 これは如何なる人ぞ 心安かれ、我なり、懼るな 沈黙の祈り 自然・靈然・神然 神の義のため 神の国

【マタイ8】

16 夕ゆうぐべになりて、人々、悪鬼あくきに憑つかれたる者をおおく御許みもとにつれ来りたれば、イエス言ことばにて靈を逐おいだし、病める者をごとごとく医いし給えり。17 これは預言者イザヤによりて『かれは自ら我らの疾患わづらひをうけ、我らの病やまいを負う』と云われし言の成就せん為なり。

18 さてイエス群衆の己を環めぐれるを見て、ともに彼方の岸に往かんことを弟子たちに命じ給う。19 一人の学者きたりて言う『師よ何処いずこにゆき給うとも、我は従わん』20 イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は罅ねぐらあり、然れど人の子は枕する所なし』21 また弟子の一人いう『主よ、先ず往きて我が父を葬ほうむることを許したまえ』22 イエス言いたもう『我に従え、死にたる者にその死にたる者を葬らせよ』

23 かくて舟に乗り給えば、弟子たちも従う。24 視よ、海に大なる暴風あらしおこりて、舟、波に蔽おほわるるばかりなるに、イエスは眠り給う。25 弟子たち御許みもとにゆき、起しこて言う『主よ、救いたまえ、我らは亡ぶ』26 彼らに言い給う『なにゆえ臆おそするか、信仰うすき者よ』すなわち起きて、風と海とを禁いましめ給えば、大なる風なぎとなりぬ。27 人々あやしみて言う『こは如何いかなる人ぞ、風も海も従うとは』

【マタイ14】

22 イエス直ちに弟子たちを強いて舟に乘らせ、自ら群衆をかえす間に、彼方の岸に先に往かしむ。23 斯て群衆を去らしめてのち、祈らんとて窃ひそかに山に登り、夕になりて独りそこにい給う。24 舟ははや陸より数丁はなれ、風逆うによりて波なやまに難なやされいたり。25 夜明の四時ごろ、イエス海の上を歩みて、彼らに到り給いしに、26 弟子たち其の海の上を歩み給うを見て心さわぎ、変化へんげの者なりと言いて懼おそれ叫ぶ。27 イエス直ちに彼らに語りて言いたもう『心安



かれ、我なり、懼るな』²⁸ペテロ答えて言う『主よ、もし汝ならば我に命じ、水を踏みて、御許に到らしめ給え』²⁹『来れ』³⁰と言い給えば、ペテロ舟より下り、水の上を歩みてイエスの許に往く。³¹然るに風を見て懼れ、沈みかかりければ叫びて言う『主よ、我を救いたまえ』³²イエス直ちに御手を伸べ、これを捉えて言い給う『ああ信仰うすき者よ、何ぞ疑うか』³³相共に舟に乗りしとき、風やみたり。³⁴舟に居る者どもイエスを拝して言う『まことに汝は神の子なり』

●波を枕として

マタイ伝8章を開いてください。

¹⁶夕^{ゆうべ}になりて、人々、悪鬼^{あくき}に憑^つかれたる者をおおく御許^{みもと}につれ来りたれば、イエス言^{ことば}にて霊^おを逐^おいだし、病める者^いをことごとく医^いし給えり。¹⁷これは預言者イザヤによりて『かれは自ら我らの疾患^{わづらひ}をうけ、我らの病^{やまい}を負う』と云われし言の成就せん為なり。

それは霊が追い出される。キリストの力にみんな驚いて、群衆が集まって来るわけです。それで、キリストはそこを避けて行こうとする。

¹⁸さてイエス群衆の己^{めづ}を環^{めぐ}れるを見て、ともに彼方の岸に往かんことを弟子たちに命じ給う。¹⁹一人の学者きたりて言う『師よ何処^{いずこ}にゆき給うとも、我は従わん』²⁰イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は峙^{ねぐら}あり、然れど人の子は枕する所なし』

「先生、何処にゆき給うとも、私は従っていきます」

「狐は穴がある、空の鳥にはねぐらがある。けれども人の子は枕する所がない」と。「人の子」とは、もちろんご自分のことです。「メシヤ」の隠された言葉です。地上には枕する所がない。ヤコブが石を枕に寝ましたね、「ヤコブの石枕」という。嗽石さんの『草枕』というのがあるが、草を枕にする。木の根っこであろうとも枕とする。ここは舟板を枕にした。しかも、普通の舟板ではない。

²³かくて舟に乗り給えば、弟子たちも従う。²⁴視よ、海に大なる暴風^{あらし}おこりて、舟、波に蔽^{おほ}わるるばかりなるに、イエスは眠り給う。

海に大なる暴風がおこって、舟がひっくり返りそうになった。舟が沈没しそうな、そういう所で、誰が本当に眠れますかね。百人のうち百人が眠れない。枕する所のないイエスだけが眠り給う。大変な霊止^{ひと}です。私はこんなところを解釈なんかできやしない。

こういうところを読んでいると、本当にその中に平伏^{ふれふ}してしまつて、先へ進めなくなる。嵐の中で眠っているひと。舟は今にも沈没する。しかし、神さまの舟は嵐に沈まない。キリストは、はつきりと神の懐の中に入っている。この眠りが驚くべき証しです。キリスト



の眠りほど素晴らしい証しはありはしない。信頼の極致です。ヒルティが『眠られぬ夜のために』という本を書いたけれども、キリストのこの一つの光景が、あの全巻に勝る。キリストの言葉も凄いけれども、キリストの実存の姿はもつと凄い。この実存の姿があるから言葉が自ずから発せられる。嵐を既に眠つていながら制しているひとです。

私たちにはいろんな人生の嵐が来る。私の母が失明して帰り、兄貴は遺骨で帰って来た。これは私にとって青年時代の嵐のどん底でした。皆さんも、それぞれいろんな嵐があったと思う。これからもあるでしょう。その時に、波を枕として眠つたキリストを思い出してください。人生の嵐にも、キリストの中に眠り込む。そういう事態。私はもう、これしか言いようがない。

●あなただけです

24 視よ、海に大なる暴風^{あらし}おこりて、舟、波に蔽^{おお}わるるばかりなるに、イエスは眠り給う。

嵐の中の、この「眠り」に、この姿に信仰の極致がある。我々は「眠れない」なんてことは、このキリストに来れば絶対に言えない。

25 弟子たち御許にゆき、起こして言う『主よ、救いたまえ、我らは亡ぶ』

正直な言葉です。「ひっくり返つて、私たちは死んじやう」と。

26 彼らに言い給う『なにゆえ臆するか、信仰うすき者よ』

キリストが「信仰うすき者よ」なんて仰るものだから——ギリシア語ではそう書いてある、キリストはギリシア語ではなかったけれども——厚くしようと思う。このキリストの言葉に躓きなざるな。「薄さ」の極致に入れればいい、「何ありません」と。

「自分の側には何も有りません。あなただけです」

と。「あなただけです」、これが本当の信仰だ。魂の世界の真理というのは、すべて逆説的なんです。

「より頼むのは自分の信仰ではありません。あなただけです」

そうすると、キリストが

「汝の信仰、汝を救えり」

と仰る。空っぽになつて「あなただけです」と言うのが本当の告白なんです。そうすると、キリストは「汝の信仰」と仰る。

「信仰が無いのが本当の信仰だ」

というわけです。それは相手を全的に信じている、全的に受けとっているから。むしろ「信仰」という言葉は躓きになるから、体受、体^{からだ}で受けとる、全存在^{ぜんざんざん}で受けとると言ったらいい。全存在でないものは全部ダメです。指を切ると血が流れる。そのままにして置けば、血が流れて死んでしまう。一本の中に全身が宿っている。



あなた方一人ひとり^{一、}が全召団を持っている。一、即、全^{一、}というのはそういうことです。

「私の中には全召団が入っています」

と、そういう人物がいると全召団は滅びない。キリスト召団というのは一人ひとりが全召団を背負っている、生命が流れている。

「私が生きていればこれは滅びない」

と、そういう一人ひとりです。キリストの生命はそれ以下ではない。キリストというひとは大変な^{ひと}霊止だ。その無限無量なひとを信ずるといふと、大変なことになる。それはもう「信ずる」ではない。

「降参しました、参りました」

と言って、^{一、}圧倒される。私はいつも言っているでしょ、

「私は信じて生きていません。キリストに圧倒されながら生きております」

と。

●芥子種一粒となれ

「一」が「全」を持つという。ブレイクの詩の中で私が一番好きな言葉のひとつは、

「To see a World in a grain of sand,

And a Heaven in a wild flower,

Hold Infinity in the palm of your hand,

And Eternity in an hour.”

「一粒の砂の中に 宇宙を観る

一茎の野草に 大空を観る

君の手の掌に 無限をつかみ

一刻の中に 永遠を持つ」

という言葉です。凄^{一、}いよ、ブレイク (William Blake 1757～1827) というのは。そういう小さいものの中に宇宙を観る。キリストもそうですよ。

「芥子種^{からし}一粒の信を持って、山が動くぞ」

と言った。「芥子種一粒となれ」ということです、「一粒の芥子種の信を持って」というのは。

「芥子種一粒となれ。それは大きな木に成るだろう。そのようなことにお前が

成れば、たくさんの鳥が宿るように成る」

と。天秤の片側に「一人」が吊り下がって、他の側に「地球」がぶら下がっている時に、「地球」の方が軽くて、「一人」が重いという。キリストは、

「もし、この生命を失わば、全世界を得るとも何の益あらん」

と言われた。それほどこの「個」の価値は、あなた方一人ひとり^{一、}は掛け替えのない存在です。人は、



「エーベンビルト ゴッテス (Ebenbild Gottes) (神の相^{すがた})
に即して造られている。本来はそうである。その「本来」に戻してくださったのが、キリストではないですか。皆さん、何を遠慮しているか。だから、パウロもペテロも

「我を見よ」

と言ったでしょ。

「キリストと一つとなつている私を見る。わがうちに有るものを汝に与う」

と言えば、足萎えが立つてしまった。そういう、キリストの直弟子の信仰に來なかつたら、つまらんですよ、信仰なんかやめた方がいい。

そのために、自己教育を、己を鍛え上げていくことをする。「鍛え上げる」とは自分で鍛え上げるのではない、キリストに鍛えられていく。キリストに鍛えられるときには、キリストは力を与えながら鍛えてくださるから、有り難い。これは、日本刀の凄いのができてしまう。ダイヤモンドよりも凄い宝玉になってしまう。

●福音は楽音

26 彼らに言い給う『なにゆえ臆^{おそ}するか、信仰うすぎ者よ』すなわち起きて、

風と海とを禁^いめ給えば、大なる風^{おおいなまき}となりぬ。

自然は、これも法則の世界です。「自然法」という。自然は素晴らしい。それはもの凄い「法」の世界、「水は低きに流れ去る」世界です。水は低きに流れざるを得ない。我々はキリストにあつて生きざるを得ない。キリストを証しせざるを得ない。これ、みな法なんです。この「法」に、神の法、「神法」に完全に乗つかつてしまつているのがキリストです。

「我を見しものは父を見しなり」

という、法の^{のり}世界です。

それから、次は「道德法」です。道德の中に本当に乗つかつて居るのは、ほとんどないわけだ。孔子が七十歳になつて、

「わが思うところ^{のり}矩^こを躓^こえず」

と、やつとそこへ入つた。孔子は孔子で偉いけれども。しかし、それはなぜかと言うと、法の中に入つたからです。

「たとえ、一人も道德法を守れなくても道德法は厳としてある」

これはカントの言葉です。本当の「ゾレン (Sollen)」「すべき」ということは、本当に受けとれば、これは必ず「ケンネン (Können)」「できる」のだという。やはりカントは凄い。「べき」の世界に本当に入れば、道德法の中に本当に入れば、「できる」のだと言つた。それは福音的にはそうです。キリストは、

「モーセの律法を完全に自分は満たした。律法の一点一画もこれを崩さない」

と仰つた。いや、たくさんキリストは崩した。けれども律法の本当の精神はキリストはそ



れ以上に受けとった。キリストの山上の垂訓はモーセの十戒よりかはるかに上の世界です。そういう霊法の世界、法の世界に乗つかってしまっているのが本当の「自由」ということです。活ける法だから、神さまのみ言葉だから、その時その時にグググッと来るわけだ。マルコ伝みたいに直ちにこれに従う。「従う」という言葉も少し二段構えになるくらいだ。そういうことは、何か知らんけれども、楽でしょうがない。だから、私は

「福音は楽音だ」
「福音は楽音だ」と言う。楽でしょうがない。深くキリストの中に祈り入って寝ると、
「今日はこれからこれをする」
という時に目が覚めてしまう。「祈り入る」ことが「眠り」になる。肉体には限度はあるけれども。

●こは如何なる人ぞ

「喉が渴いた。その水をおくれよ」
と、キリストがサマリアの女に言った。

「お前さんはユダヤ人なのになぜサマリア人にそんなものを願うのですか」

「いや、私がお前にやる水を飲めば、ヤコブの井戸の水は飲んだって渴くけれども、この水を飲めば渴かないから」

「それはどこから汲んで来ましたか」

と。面白いね、あの会話は(ヨハネ4:5～42)。

「私のやる水はお前の中でもって泉となって湧きいでるぞ」

なんて、全く次元の違ったことを会話している。

「お前の夫は、今度は五人目だね」

と見抜かれてしまった。

「これは大変な預言者だ」

と。もう水のことなんか忘れてしまつて村の人達に、

「来たりて見よ」

と。どこを読んでも、キリストは大変なひとですね。こういうキリストにぶつかつて、その中に入ってしまうと、楽しくてしようがない。

だから私は、著作集第十巻の表題は——『一日千年』は止めた——『聖書は大ドラマである』にした。主人公はキリストでござるというわけです。

さつき、私が講演した後で、或るお母さんと娘さんに——お二人とも少しご病気がある——私は手を按いて祈つた。そのお二人が後でやつて来て、もう目を輝かして

「楽になりました、先生ありがとうございます」
と、とても喜んでいた。

「あなた方、どこが悪い、ここが悪いではない。キリストさまがあなたの中で生命となれば、どこが悪い、ここが悪いも皆消えて行くよ」

と、そういう角度から祈った。「妙薬」どころの騒ぎではない。キリストは大変な薬であるし、大変なお医者さんだ。キリストを抜きにして、やれこの薬だ、かの医者だなんてやってたつて、それは補助は多少はするかも知れないけれども、いつまでたっても始まらない。キリスト一点張りです。

「今晚、あなたはどうしても治してください、私の中に力となってください」といったような具合で祈り込んでください。凄いことになるから。

マタイ伝8章に戻ります。キリストは自然の法則を乗り越えて、嵐を靈法をもって押さえてしまった。

26 彼らに言い給う『なにゆえ臆するか、信仰うすき者よ』すなわち起きて、
風と海とを禁め給えば、大なる風となりぬ。27 人々あやしみて言う『こは
如何なる人ぞ、風も海も従うとは』

全く、「こは如何なる人ぞ」です。

「空の空なるかな、すべて空なり。……日の下には新しきものなし」(伝道之書
1:11-9)

というけれども、ここにただ一つの新しいことが起きた。いやあ、大変な世界だね、これは。福音書を破り取ってポケットに入れて、電車の中でもどこでも読みなさい。私の懐にはキリストがござるというわけだ。

●心安かれ、我なり、懼るな

マタイ伝の14章を開いてください。これはマタイとマルコに出ている、ヨハネにまたちよつと出ていますが、マタイが一番詳しい。22節から、

22 イエス直ちに弟子たちを強いて舟に乗らせ、自ら群衆をかえす間に、彼
方の岸に先に往かしむ。23 斯て群衆を去らしめてのち、祈らんとて窃に山に
登り、夕になりて独りそこにい給う。

キリストは徹夜で祈った。「祈る」というのは、キリストは徹夜をして、本当に深く深く神さまと一つになった。キリストの祈りというのはただ長く祈るのではない、質が違う。もう小さい時からそういうことだったのでしょね。

24 舟ははや陸より数丁はなれ、風逆うによりて波に難されいたり。25 夜明の四
時ごろ、イエス海の上を歩みて、彼らに到り給いしに、26 弟子たち其の海の
上を歩み給うを見て心さわぎ、変化の者なりと言いて懼れ叫ぶ。

弟子たちは幽霊かと思って恐れ叫んだと、そのまま書いてある。

「なんだろう、化け物が来た」



と。分かんないんだね、先生が来たことが。これも普通の物理法則を越えている。霊法の
凄(すご)い世界です。

27 イエス直ちに彼らに語りて言いたもう『心安かれ、我(われ)なり、懼(おそ)るな』
この言葉です。

「シャーローム。安心しろ、私だよ。恐(おそ)がることないよ」

「心安かれ、我(われ)なり、懼(おそ)るな」

とは、人生の私たちの歩みにおいて非常に大事な言葉の一つです。これもやはり嵐だ。今
度は、キリストは海の上を歩いてやって来た、舟と一緒に乗ってないで。

「安心しろ、私だよ、幽霊ではないよ」

と。ペテロは簡単だから、

「そうでしたか。それじゃあ、御許へ行かせてください」

と。

28 ペテロ答えて言う『主よ、もし汝(きみ)ならば我(われ)に命(いのち)じ、水(みづ)を踏(ふ)みて、御許(ごこ)に到(いた)ら
しめ給(たま)え』29 『来(きた)れ』と言(い)い給(たま)えば、

「来(きた)なさい」と。彼は全(まこと)的に受けとった。水の上を歩いたよ、ペテロも。何(なん)歩(ふ)だか知らんけ
れども。このペテロの姿(すがた)はいい。とにかく、一(ひと)応(おう)全(まこと)的に歩いた。ところが、

ペテロ舟(ふね)より下(くだ)り、水の上を歩(あ)みてイエスの許(もと)に往(ゆ)く。30 然(しか)るに風(かぜ)を見て懼(おそ)れ、
沈(しず)みかか(か)りければ叫(こ)びて言う『主よ、我(われ)を救(たす)いたまえ』

さつき(マタイ伝8章)は

「私たちは滅(ほろ)びる、救(たす)ってください」

と、今度は

「自分は沈(しず)むから救(たす)ってください」

と叫(こ)んだ。水の上を渡(わた)るような信仰(しんぎょう)、これはもう100%の信(しん)だ。折角(せきかく)そうだったが、今度(こんど)
は横(よこ)を見た、風(かぜ)と波(なみ)とを。それはもう沈(しず)むです、分裂(ぶんれつ)してしま(な)ったから。

31 イエス直(ただ)ちに御手(ごて)を伸(の)べ、これ(こ)を捉(とら)えて言(い)い給(たま)う『あ(あ)信仰(しんぎょう)うす(よ)き者(もの)よ、

何(なん)ぞ疑(うたが)うか』

ここでも、「信仰(しんぎょう)うす(よ)き者(もの)よ」と仰(おほ)った。ペテロを舟(ふね)に乗(の)りつけて、そしてまた風(かぜ)を凧(たな)にして
しま(な)った。

32 相(あ)共に舟(ふね)に乘(の)りしとき、風(かぜ)やみたり。33 舟(ふね)に居(ゐ)る者(もの)どもイエスを拝(あが)して言(い)う

『ま(ま)ことに汝(きみ)は神(かみ)の子(こ)なり』

と。

「キリストは神(かみ)か、神(かみ)の子(こ)か」

なんて、下(くだ)らないことを言(い)って騒(さわ)いでいるの(の)が(の)いる。あ(あ)あ(あ)いう神学(しんがく)は嫌(いや)いだね。神学(しんがく)なら
ば本(ほん)当(とう)の告(こ)白(はく)の神学(しんがく)でな(な)ければダメ(ダメ)です。告(こ)白(はく)であり、ド(ド)ラ(ラ)マ(マ)である。私(わたし)の『無(む)の神学(しんがく)』



なんてのは、その世界に入らなければ分からない。この、

「来たれ」

は、キリストが「来い」と言う時には同時に力が働く。その「来い」という力ある言葉がそのまま受けとつたから歩けた。ペテロの信仰が素晴らしいので歩けたのではない。キリストの力です。力を全的に受けとつたから歩けた。その素晴らしい力にありながら、横つちよを見たから沈みかかった。

●沈黙の祈り

身体が平伏ひれふさなくても、何をしていても、本当にキリストの中に平伏し、そのキリストの中に入る。これは力の来る秘訣です。沈黙の祈りが一番速い。そして一番深い力が来る。沈黙というのは言葉にならないから黙る。言葉で表現できないから黙ってしまう。沈黙して祈り込んでいるうちにバアーツと異言が出たりする。これは仕方がない。そして身体が振動する。霊動レイドウです。私は床とこの上でしょっちゅうそれをやっている。書齋で寝ているから。何時間眠るかということは問題でない。睡眠も質だ。嵐の中で眠るようなキリストだから、大変なものだ。「祈り入る」ことと「眠り入る」がキリストでは一つなんだ。神さまのみ力の中で楽に眠る。これはもう説明できない。そして、何か祈り込んでいると、その内容が今度は夢に現れたりする。

舟の中で眠っていたキリスト、波の上を渡ってきたキリスト。この二つが、静と動とが一如なんです。静であつては波の上を枕とする。動であつては波の上を渡る。大変な霊止レイトだ。静動一如です。ある時は、キリストは飛んじやうかも知れない。エリヤは天界へ飛んで行ったけれども、キリストも、もし十字架にかからなかつたら、天界へ飛んで行ったんだ。けれども、我々を救わんがために、イザヤ書53章を身をもって証しなされた。

今度の私の著作集第十巻『聖書は大ドラマである』の

「十字架の義と愛」(11月1日)

の項は、一番凄いとところかも知れない。十字架のキリストのところですよ。私は、この一巻ができればいつ死んでもいいと、ある意味においては思っています。その先に一つの仕事を携たづなっているけれども。10か月で、とにかく創世記から黙示録まで全部読みながら——一字一字読んだわけではないけれども——聖書の中に酔っていた。注解書なんかほとんど見ない。全部、告白的解説です。

キリストと共に動くならば波の上を渡るような、キリストと共に眠るならば嵐の中で波を枕として眠るような。キリストはそういう驚くべき実存だ。枕する所なき人が、どこでも枕とする。歩けない所がない。山路であろうと、荆棘けいぎよくの路であろうと、海の上であろうと。キリストは甦よみがえつて来れば、おさかなを食べたではないですか。

「何か有るか? お魚を食べよう」



と、食べた。あれは、ほとんどの神学者も牧師も、

「まあ書いてあるから仕方がない」

と思っっているくらいで、信じてはいない。しかし、私ははっきり信じている。大変な次元です。とうてい説明なんかできない。もう、私はその次は異言だからあまり言いたくない。

●自然・靈然・神然

十二召団の方々は——なにも私は「十二」に限っていませんけれども、とにかく「十二」というのは無限と完全を意味するから、ただ「十二」と言っているのだけれども——私がぶつたおれて居なくなつて、あなた方がもし分裂したりダメになったら、それは聖霊がなくなつたからと、それだけのはなしだ。聖霊がある限りどんなに破れ召団であろうとも、必ず前進していく。人間的な良さだとか、整い方だとか、そんなことは問題ではない。一人びとりが光っていないくは。親鸞は軒ばたに眠っていれば、そこにほのかに光が射していたという。大変なものだ。その世界を本当に生きていなければ、証言したら偽りになる。止むに止まれずして語らしめられる。

私たちはそのように、光・生命・愛(リヒト・レーベン・リーベ)なる——これは三つの「L」だけれども——御霊のキリスト、キリストの御霊と一つになって、今度は自然を見てごらん下さい。自然がまた本当に一つになって来る。

「自然(自然法)・靈然(靈法)・神然(神法)」

これはみな法の世界です。一番素晴らしいのは「神法」の世界だ。この法の世界にキリストと一緒に入ると、人間界また自然界に対しても、本当にこれと一つとなって、自在に、花を見れば花となり、雲を見れば雲となれる。そういう魂になる。

●神の義のため

ヘラクレスという、力強い化け物みたいな人間がいた。ゼウスが神々を招いて饗宴した。ヘラクレスも呼ばれていったら——彼は神さまではないけれども——神々が皆やって来た。ヘラクレスは皆によくおじぎしていたが、最後にプルーツスが入って来たら、彼は横を向いてお辞儀もしない。ゼウスが

「お前はなぜプルーツスにお辞儀をしないのか」

と聞くと、

「あのプルーツスは私が人間の世界にいた時に、悪い奴といつも一緒にいたから、

嫌いなんです」

と答えた。プルーツスというのは「富」の神だから、財産を悪いことでもって儲けた奴がたくさんいる。そういう悪者と一緒になつているプルーツスなんかにお辞儀するわけにはいかない、というわけだ。そういう、法に逆らうところの欲の世界がある。



「欲心が戦争を起こす」

とヤコブも言った通り。人間の世界は世界中、欲だらけだ。「土地ころがし」なんてエライことやっている。それで地価が上がって、相続税が払えない。日本みたいな馬鹿げた世界はない。おかしいことになったね。日本人は欲のかたまりで、段々つり上げて、物価も上がって行く。一番危ないのは日本です、「富の神(マンモン)」に仕えているから。

“for Japan,

Japan for the world”

「私は日本のため、

日本は世界のため」

というように、そういった政治家が本当にいれればいいけれども、「世界は日本のため」なんて思っているから、とんでもない話だ。

「わが神、わが神、なんぞ我を捨てたまいし」

とある。神の義のためには戦う。キリストがああ叫びを挙げなかつたならば、天地を貫く神の義は成り立たない。あれはそのための叫びですよ。キリストの「わが神、わが神、なんぞ我を捨てたまいし」とは、

「あなたの義を貫いたこの私をなぜお捨てになるか。しかし、この義は人を救うために捨てる」

と、それが十字架の愛なんです。絶対矛盾の自己同一なんです。「神の痛みの神学」という、「痛み」どころではない。キリストの十字架は砕けのものの凄い世界です。これは甦らざるをえない…(異言)…。こういうキリストを私は思うと、言葉が言葉にならない。もうグーッと全身に力が来る。証しせずんば死ぬわけにいかん。

●神の国

欲のやつとわざわざ戦うことはないけれども、そんなものはもう超越した世界です。それから、パリサイ人、これもみんな相手にならない。天下無敵というのはそのことなんです。このキリストの中にはいると、みんな許して、みんな包む。ただ、逆らつて来る奴は自分で滅びて行くだけです。お気の毒さまというわけだ。キリストはみんな救おうとしてやつてらっしゃるんだけど、キリストを拒んでいるんだから、それは仕方がない。迫害を受けた人たちが

「早くこれを復讐してください」
と言うと、

「もう少し待つてころ」

とキリストが仰る。黙示録の6章に書いてある。

神の国は我々の中にかく現在しています。だから、必ず神の国は来ます。終末的現実を



私たちはいただいているから、

「天国は汝らの中に在り」

ということですよ。だから、神の国は歴史の終わりに必ず来る。人生は序曲に過ぎない。それだけの烈々たる魂です。希望は決して空望でない。希望は現実に、その希望の保証をいただいている。過ぎゆくものの中に、過ぎゆかざるものをつかんでいる。

皆さん、もう、烈々たることにならざるを得ないでしょうが。クリスチャンで、くすぶつた様な顔してたらダメだよ。何でもござれと。必ず逆に聖霊が働く。いろんなことにくわせばでつくわすほど、必ず働く。これは事実が証明する。

私くらいな年になると、回りの同じような年配や、もう少し下の方でも、肉体ばかりではない、精神的にも、みんなもうヨボヨボしてしまって、薬の話ばかりしている。私は来年から歳を一つずつ減らすからね。来年、84歳でなくて、82歳になる(笑)。冗談だけれども、そういう気持ですから。青年に負けないよ。肉体は、相撲とつたら負けるさ。けれども、魂の迫力だったら負けない。しかし、皆さんは私を乗り越えてくださいよ。小学校の同級生は皆いなくなってしまう。24人みな全滅だ。一番小さくて、一番弱虫の私がどうしてこんなに生き残ったか。キリストの力です。耳も遠くならない。

●キリストという舟の中に

波の上で眠ったキリスト、波の上を歩いて来たキリスト。この静と動の二つの相を、じっくり自分の中に頂いて、本当にキリストの中に、キリストという舟の中にのり込む。そうしたら、このキリストの話は非常に楽しくなる。よし、人生の嵐はいくらでも来いと。道が行き詰まったと思ったら、豁然かつぜんと開かれる。本当に不思議ですよ。計算したらダメですよ、算盤そろばんなんかうまくならない方がいい。間違つてばかりいる方がいい。私は財布のなかを計算したこともないものな。

私たちが使っているこの「聖霊みたま」という言葉は我々の間ではこうやって通じますけれども、普通、「聖霊」なんて言ったってダメなんだ、通じない。まあ、しょうがないや。キリストも、

「聴く耳あるものは聴くべし」

とおっしゃった。

「説明したって始まらない。みんな暗号だよ」

というわけです。

どうぞ、皆さん、「波枕のキリスト」と「波を渡るキリスト」と、それは我々の人生においてそのような嵐の中を波に眠るキリストと、波を渡るキリストと一つになって、

「ああやつぱりこれはエライ福音だった」

ということを、これから人生の色んな波風でもって体験して、体現して行きましょう。

